



企業連携インタビュー

東京専門職大学（仮称）への期待

第2回 （社）東京青年会議所 江東区委員会委員長 伊藤 海氏

2018/7/3

-まずはじめに、青年会議所でのお役目と、宜しければご自身の事業についてお聞かせください。

今年度、東京青年会議所 江東区委員会 で委員長の職を頂いています。江東区の活動の全体統括、新しい企画の立案・報告などが主な役割です。青年会議所の活動の主なものは、5月のわんぱく相撲の開催、そして10月の江東区民祭りでの活動です。江東区民祭りは、2日間で40万人が集まる、区が主催するお祭りとしては全国有数の規模のお祭りです。このほか、青年経済人の活性化のための勉強会や交流会の開催などを行っています。委員長の期間は1年間、利害関係のない団体の活動において、参加者のベクトルをどのように合わせるかはなかなか難しく、とても勉強になります。また、本業ではあまり接点のない方々と交流できるなど、やりがいを感じています。

本業は江東区内で産業廃棄物処理業を営んでいます。事業を立ち上げて10年目になります。環境問題に興味があり、いつかは独立したいと考えていました。

区内で10年事業を続けてきましたが、あまり地域との繋がりがなく、青年会議所に入ることで地域との関わりを持つことができるだろうと考え、入会しました。

小さな会社でもあるので、自分たちの利益を追求する以外に目的意識を持つことも大切ではないかと考えています。青年会議所のイベントには、当社の従業員も参加しますが、地域の方に喜んで頂けると、従業員も喜びます。



-専門職大学についてどのような期待をお持ちになりましたか？

専門職大学の説明をお聞きし、大学になると海外との連携がしやすくなるということが印象に残っています。国ごとに強み弱みがあるだろうと思っていますが、大学になり海外との交流の機会が増え、海外の良さを取り入れる機会が増えるのは良いことだと思います。可能性を秘めていると感じました。



実は私の子供が理学療法士の方にお世話になっていますが、一人の方はドイツでも学んだ経験があるそうです。その方によると、ドイツでは日本で学ぶような専門分野に加え、異なる分野の学びもやっているようで、日本でも今のカリキュラムを超えた事柄を学ぶ姿勢が大切なのではないかと話されていました。いろいろな制度ややり方があるため、日本の制度の中で立ち止まってしまうのではなく、海外での取り組み、あるいは日本でも分野が異なっても参考になりそうなことは学んでいくと大分違うのではないかとおっしゃっていて、それはしっくり来ました。

たとえ話で、壁を作っている3人の職人さんに何をしているのかと聞くと、一人は「私は壁を作っている」と答え、別の人に聞くと「家を作っている」、更に別の人は「私は人が幸せに暮らせる空間を作っている」と答えた、という話があります。最後の答えに近いものを、私の子供を担当していただいている方にも感じています。保険診療の枠にこだわらず、治療方法を考えていただいています。

理学療法士の方でも、例えば手が動くことを目的に施術をする方もいれば、この子が保育園や幼稚園、あるいは学校生活で今後どういふことをやっていくのかまで考えて施術してくれる方もいます。これらの考え方には、大きな差があると思います。肘の角度が何度曲がるようになった、という観点は技術的には重要なかもしれませんが、施術を受ける側からすると、結果としてどのような生活ができるようになったか、ということが重要です。治療や施術が目的なのではなく、結果としてどのような生活ができるようになることが望ましいか、考えられる人材が多くなると良いと思います。

-今のご指摘は、専門職大学で重要とされている『想像力』『展開力』につながる力について、とてもわかり易くお話しいただきました。

本学では、2学科合同での授業を含め、多職種連携についても実践的に学びます。

理学療法士の方など医療関係者にお世話になる際、治療に際してなど、縦割りになっているイメージが強いです。もっと連携して、包括的に診てもらえると良いと感じています。大学での教育も、そのような視点を持てる人材が育成されると良いのではないのでしょうか。施術をする方々が現実の問題点を元に、今の制度を変えていくうねりを作るような状態になると良いと思います。



-本学は医療福祉を専門としながら経営についても科目を充実させていますが、起業されたご経験から、このような教育についてどうお感じになりましたか。

(経営についての科目は) 非常に重要な視点だと思います。私自身が利用する施設では、整体や鍼灸があります。その中には、技術は優れているけれども、経営が上手だったらなと思う施設もあれば、そこそこの技術かもしれないけれど、見せ方が上手く経営されている方もいます。これから様々な活躍の場があると思いますので、広い視野を持ち、さらに自分で事業を起こすという可能性も持ち続けていると、学びも深くなると思います。

私自身は、いつかは起業したいと思っていました。新卒で入社した会社では労働条件がきつかったのですが、一種修行の場所のように考え、これだけ働けば自分でもやっていたのではないかと思うようになりました。若い頃の苦労は良い経験になっています。

前職は拠点が多い会社で、各拠点の損益を任せられ、損益と資産、BSとPLをしっかりと見ておくようにとうるさく言われていました。売上、原価、粗利、がどれくらいになるべきか、叩き込まれました。販管費はどこまでかけられ、利益がどの程度残るかという、予算をたてられること、自分で事業を行うようになるとその重要性を身にしみるようになりました。事業を立ち上げてうまくいかないケースは、財務管理が弱いようです。

また、私が通っている鍼灸では、企業としてしっかりしているところが何社かあります。それらの会社では、従業員の教育がしっかりしています。東京専門職大学ではクレドを設定していच्छるところに感銘を受けました。会社や学校をどういうものにしていくか、明確なものがないと。しっかりと目標を定めているところが素晴らしいと思います。

-本学が更に強化すると良いと思う分野や要素、科目などがありましたら、アドバイスをお願い致します。

今施術してもらっているリハビリの方々にあつたらいいなと思うものの一つに、栄養学の知識があります。あと、とても欠けていると思うものは、「おしゃれ」の感覚です。授業に「ファッション」や「色彩学」などがあるといいですね。子供のリハビリテーション施設は、病院施設はきれいであつてはいけないのかと思うような施設、あるいは使っている器具



や遊具も、予算がないのが大きいのですが、ダンボールをテープでつないだ職員の手作りであつたりします。高価なものを揃えて欲しいわけではなく、例えば要らなくなったおもちゃを譲ってください、といった工夫ができるのではないのでしょうか。



「美容」はとても良いと思います。障害を持っていても、肌がきれいであつたら嬉しい、と思うのではないのでしょうか。経営分野では、ベンチャー経営者の話が聞けるとよいと思います。

他には、「ニッポン」を意識し、大切にしている企業が増えてきていると感じていることがあります。ニッポンを意識している会社は、社員がいい意味で尖っているなど。ぶれないものを一つ持っているのは大きいと感じました。ここは大したものだと思った会社で、新卒を斡旋する会社ですが、社長が日本人たるもの日本を知らなくてはだめだ、という考えで事業を行っている企業があります。学生に就職活動のための名刺交換の仕方や経営学を学ぶ、といったサポートを行うカリキュラムの中で、ニッポンの歴史、海外との比較といったことを教えており、業界で非常に高い評価を得ていると聞いています。貴学の理事長もニッポンを大切にすると聞いていますので、ニッポンについて学ぶ機会も設けると良いかもしれません。

-地域社会との関係で、本学への要望などあればお願いいたします。

江東区には大学が少なく、特にこの地区にはこれまで大学はありませんでした。そのため、地域の期待も大きいと思います。開学後は、行政と絡めることは多数あると思います。江東区は地震や水害に弱い地域です。災害が起きたとき、大学としてこういう事が出来ます、学生たちがボランティアをできます、ということを地域社会や行政に知ってもらいたいのではないのでしょうか。AEDはあっても使える人がいない、というような話も聞きますが、保健医療の知識がある人たちがいる、ということは地域が求めている情報だと思います。江東区とも連携をしていって欲しいと思います。

**ご自身の経験に基づいた貴重なお話をお聞きすることが出来ました。
インタビューにご協力いただいた伊藤様、大変ありがとうございました。**